「気象神社」と「山吹伝説」

【第１０回】「気象神社」と「山吹伝説」

航空気象群ホームページ「気象の杜」へお越しくださいました皆様、
令和５年２月の「気象の杜」は東京気象隊からお届けします。

東京気象隊は、東京都新宿区にある航空自衛隊市ヶ谷基地（防衛省の敷地内）に所在する部隊で、航空幕僚監部や統合幕僚監部に気象情報を提供することを主な任務として、市ヶ谷基地の気象予報をはじめ、様々な気象情報の作成と提供を日々行っています。今回の「気象の杜」では、当地東京と天気に関係する二つのお話をします。

【気象神社】

この時節には航空機の飛行、地上活動の一年の安全を祈願するため、ある神社に参拝することを慣例としています。その神社の名は“気象神社”、私たちの仕事にうってつけの神社です。気象神社は、東京都杉並区高円寺に鎮座し、ご祭神は八意思兼命（やごころおもいかねのみこと）で、多くの人間の知恵を一同に結集させることができる「知恵の神様」です。神話によると天照大御神が天の岩戸に隠れて世の中が暗闇になった時、岩戸を開けて天照大御神を外界に戻す知恵を考えだしたのが八意思兼命であり、再び世界に「太陽」を取り戻し、世の中を救うことに成功しました。このことから気象の神様と祀られるようになり、その名の通り「晴」「曇」「雨」「雪」「雷」「風」「霜」「霧」という八つの気象条件を司ることができるとされています。

気象神社は、当初、杉並区馬橋地区にあった大日本帝国陸軍陸軍気象部の構内に造営され、科学的根拠に基づいた予報がされていましたが、予報的中を祈願するなど気象観測員の心のよりどころとされていたそうです。“気象”は軍にとって戦略・作戦を立てるにあたって重要な要素となることは、先の「気象の杜」においてご説明させていただいたとおりです。

【山吹伝説】

東京（場所は諸説あり）を舞台とした伝説を紹介します。天気予報の対象となる代表的な現象、「雨」と春の花「山吹」にまつわるものです。

江戸城を築いた武将で知られる太田道灌が狩りに出かけたところ、突然の雨に降られたため農家で蓑（みの）の借用を申し出ました。ところが応対に出た娘は、蓑ではなく山吹の一枝を差し出しました。道灌は「自分は山吹ではなく蓑が借りたいのだ」声を荒げますが娘は答えません。道灌は城に帰り古老にその話をすると、“七重八重花は咲けども山吹の実の一つだに無きぞ悲しき”という平安時代の和歌があり『蓑』と『実の』が懸かっていることを教え、貧しい家で蓑一つも無いことを山吹に例えた娘の行いを説きました。道灌は自分の無学を恥じ和歌の勉強に精進しました。後にこの娘を城に呼んで和歌の友としたという伝説です。

もし雨が降らなかったり、雨が降ることが予想され狩りに出ることをやめた場合、道灌はこの娘と出会うことはなく和歌を勉強する機会を得なかったでしょう。そう考えると気象は人の人生を左右するという趣をこの伝説から感じとることができます。

気象現象はいつも身のまわりに現れ、仕事や生活に様々な形で影響を与えます。気象情報を利用する方々は、有効にそれを利用し社会活動や福祉に役立てていただきたいと思うばかりです。人としてできる備えを尽くしたあとは、神様にお願いするのも良いのではないでしょうか。

「気象の杜」へのご訪問、誠にありがとうございました。次回もお待ちしております。